

特67

425



017089-000-8

特67-425

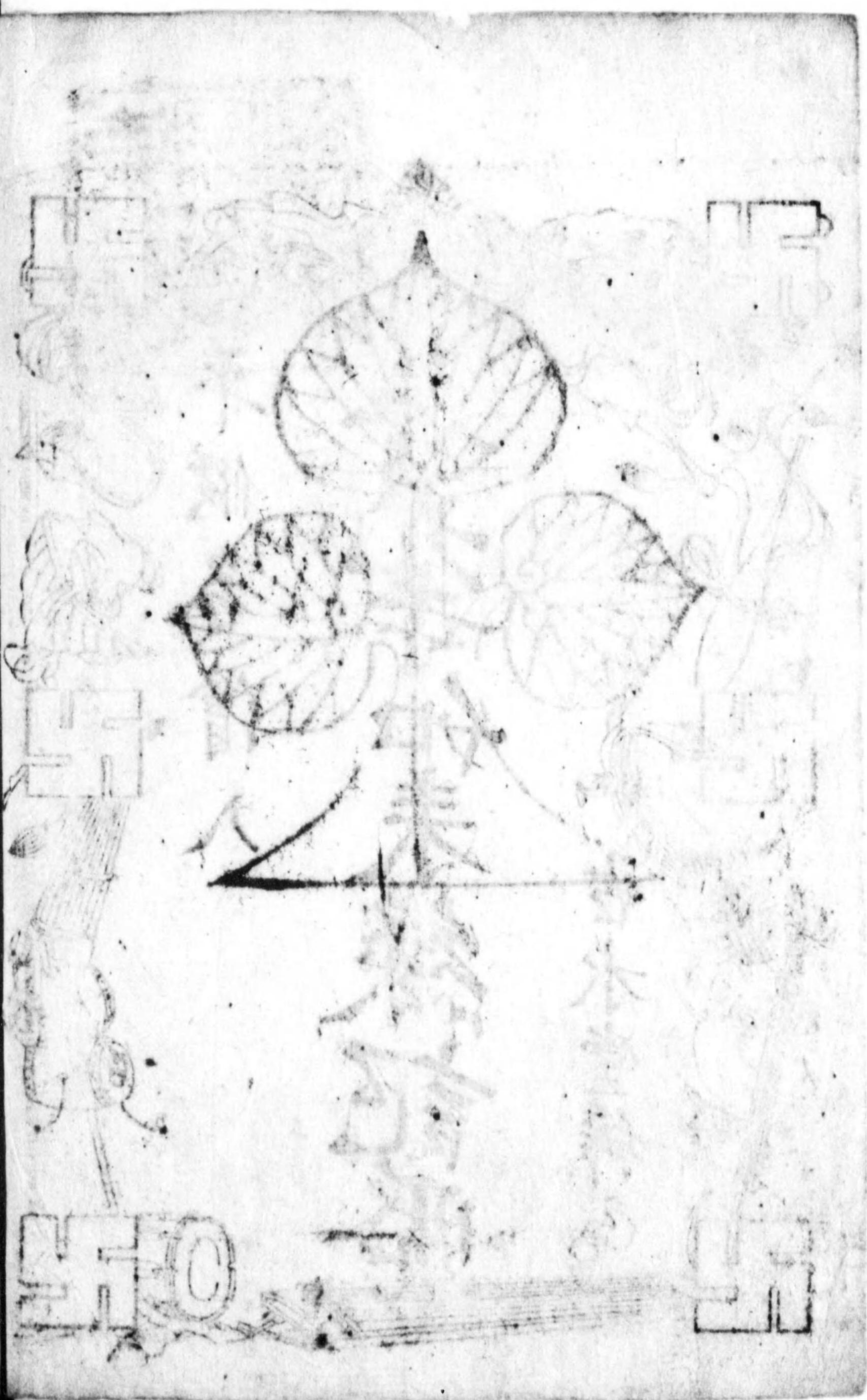
善光寺如来縁記略(平假名繪入)

水沢 友二郎/著

M16.3

ABE-0374

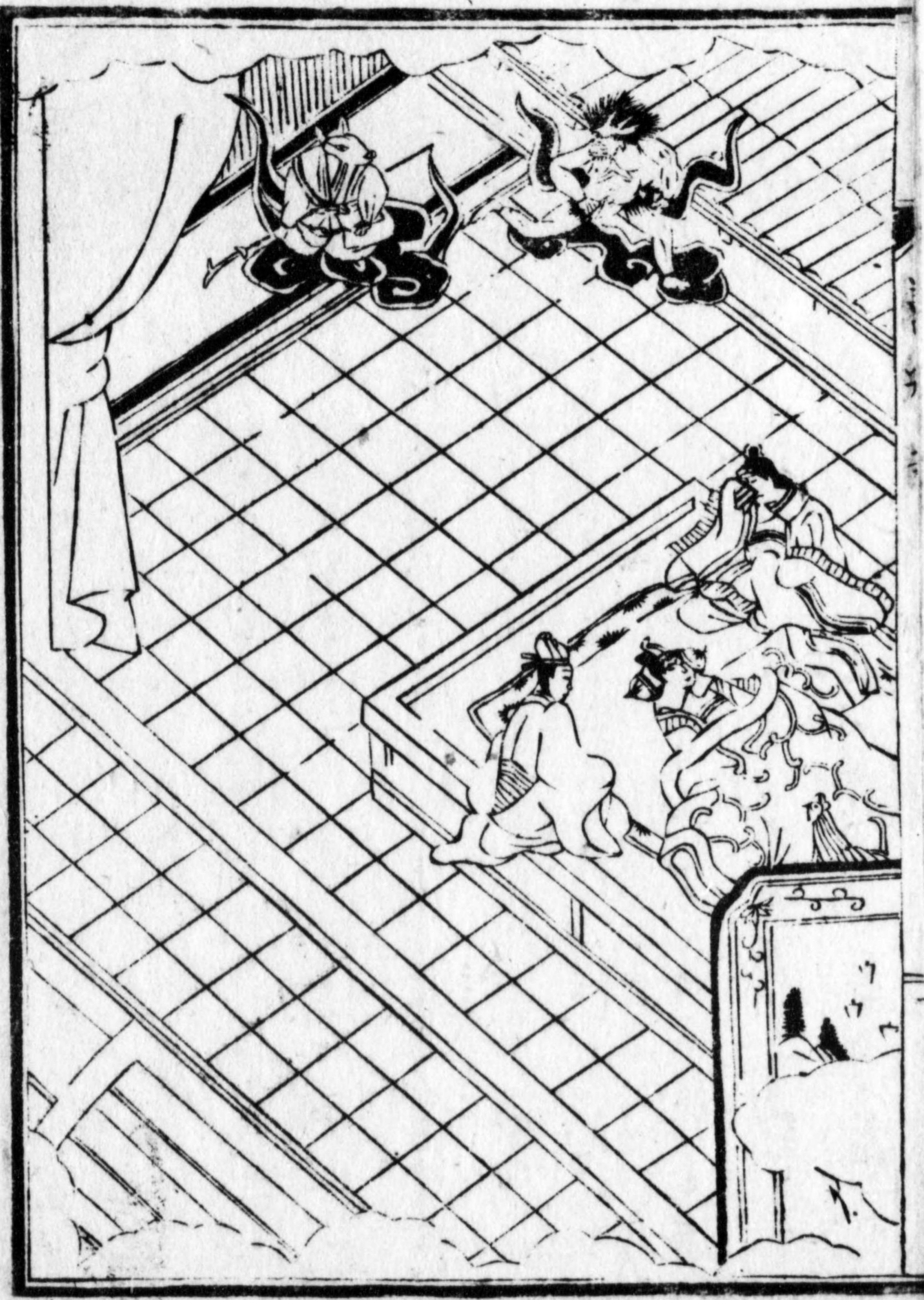




信濃國喜光寺南本堂
 大聖觀音
 大聖觀音

信濃國喜光寺南本堂の何体陀如來三國佛の由來を尋
 奉天竺毘舍離城の仙人月蓋長者者其志願よりて
 一の日の爰二月蓋長者二子如是此の巻おおれ
 大聖觀音の佛教化とほつは不善の行ひを
 の疫神評議一二月蓋長者不善をわひ
 て三字を無れぬその係をなれを女子の
 小五種の温病をうへて狂乱せしむる
 る撰へる者か彼子入りしれを
 方かあり又の長老の考
 布一又徳の強者の行法を
 善光寺

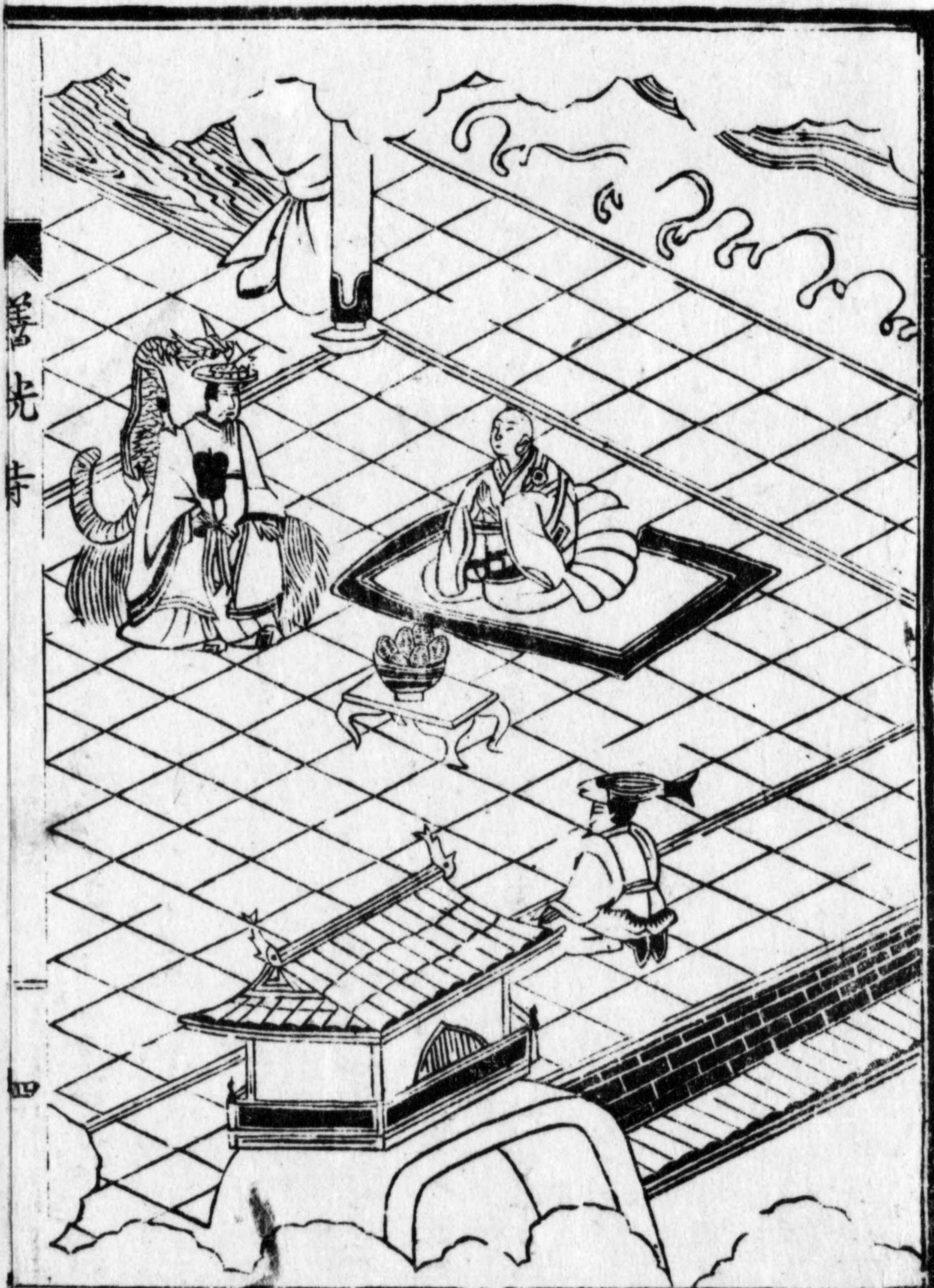
善光寺



其あやひありりたり彼長者に着馬一人五百人の長者ありて昼夜
 ひまあり仔細をありたりるに地上に仏力よりありて大林精
 舎さまにまはり大聖釈迦牟尼世尊を衆生の苦患を救ふよし
 今以佛仏の神力ありてに柱たまた方ありて一もぎ香閣を
 法で罪障を懺悔し歎きませむへりてを係めり白長者も
 人々の深き法をいひてはた大林精舎に宿して候て候て候て候て
 大聖釈尊のふんく女女子の命を助けん外には便ありて唯一の
 法ありはり考め候て候て候て候て候て候て候て候て候て候て候て
 を念に罪障を懺悔し清くをまへりて長者は候て候て候て候て
 宅よりりて法浄ふんをかておけり西方ふむらひ三尊に帰命



礼拝一四行の伽藍を唱へる時西方の阿彌陀如来長老之中
 をあろしめし一ひへり千五百億那由他恒河沙由旬の相好を具して
 一尺五寸の佛形を現し長者西の樓門に現し大光明ををあらわ
 畏舎翫城を率しあかゆと天鷹度非つてらりて所あらん者
 教を説き過失をりし時生身の何れも大光明の中より群衆を唱へ
 親善誓ふの二菩薩も共にお伴の化身を有し度大の佛身をあらわ
 て一尺の佛形を現し定意の掌の中におま珠の葉葉を掲げて如来の
 左右に立彼おとす。葉を楊柳の枝にひくきまをりてそま玉にほ
 ぎや其を海霧をくくむのくくけり下りて國中の病者おかりり
 りんぐくまうねるこころ平念せり如是既の既と息絶たりり

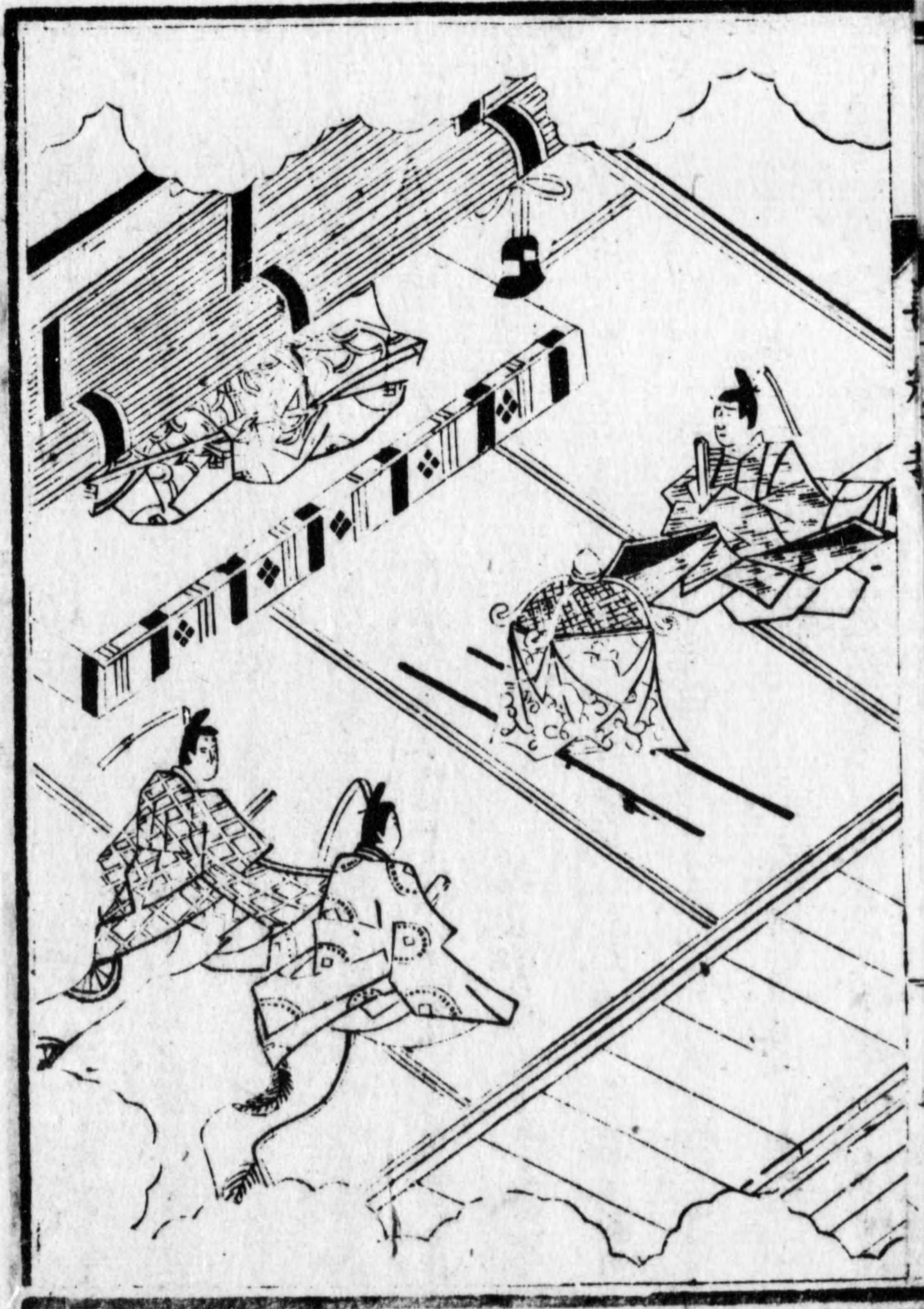


善光寺

何事僧侶の光りては穂生一又二菩薩の良薬をよきせむにこれ
身心安楽を以て於て引之の如く安んず成るれを
長者を以てよんを信の涙ををぎ信人肝も落す可く
長者の信作の信り親等の御所なり今此三号の御形を以て
奉りてやき等の芳恩を報て奉らん我形ひを哀愍一玉へ
しりこれに寺に長者の志形を誓いむ非通第一の月連に修せぬれ
龍宮城の岡浮檀金を取らせむ新四の三号に先明し親等の光りて
たを以て是と望しむにこれよき後あるべし其金三号の仏何と成玉
を以てよき此善光寺の孝号は是ありしてする年を修する海國に
~~~~ 玉ふ其目的の聖明子なり月蓋長者の後身あり聖明王如來

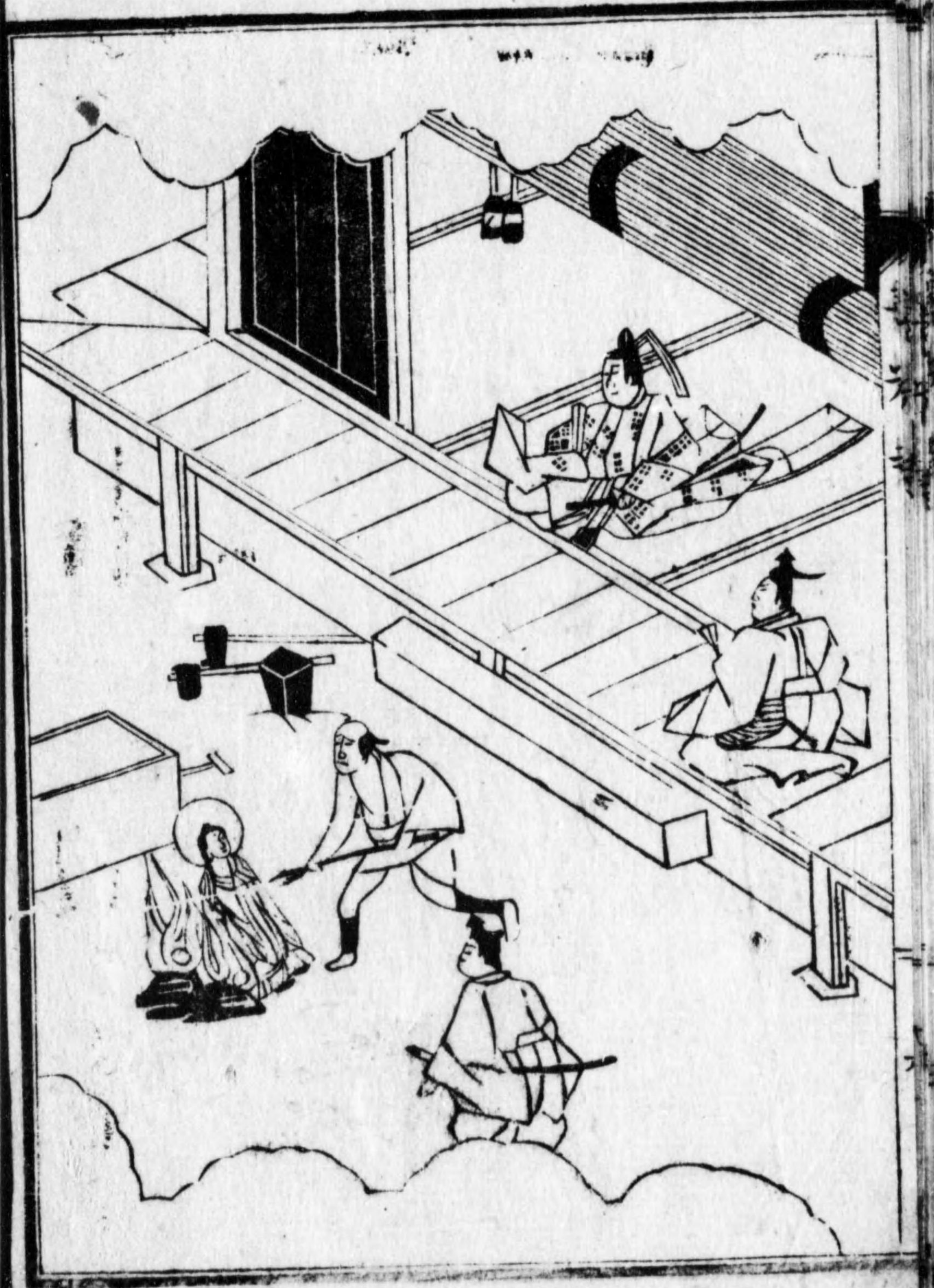


此の教一 素中 小舟 並一 素一 流 明 なる 命一 ありて なる 流 なる こと  
 出 他 守 あり する 二十 二年 帝 三 九 代 なる 事 あり 一 後 に 九 代  
 の 帝 推 明 王 に 告 げ せ せ 告 我 今 する 命 なる 衆 生 へ 傳 へ せ ば 是 なる  
 東 海 へ 越 へ 一 の 命 土 あり 大 日 本 國 へ 名 一 此 國 の 元 生 へ 傳 へ 既  
 り 熟 一 ぬ ね を 彼 國 へ 送 へ 要 業 の 程 なる 漸 なる 一 幸 なる  
 こと あり 後 妃 百 友 出 別 れ を 惜 む こと 之 力 及 ば 勅 使 並 二 人 の 傳  
 へ 差 添 へ 我 朝 に 送 へ 奉 る 事 なる 携 へ 難 股 傳 へ 着 せ たり 時  
 人 皇 二 十 代 欽 明 天 皇 の 侍 中 十 三 年 壬 申 の 十 月 十 三 日 未 の 刻 あり  
 夫 なる 勅 使 大 和 國 山 部 郡 斯 岐 飯 嶋 の 金 刺 の 内 裏 へ 一 推 明  
 王 の 書 翰 なる 携 へ 奏 聞 する 天 皇 諸 臣 下 へ 納 不 なる 評 後 せ たり 事 なる



に多し、寺受納可ふらひとせし、処不獲、我の大臣稻目右衛門  
等達て寺教まじりて、南を奉聞し、けり、沼と下し、小聖  
田の山殿を度めて、如未を移し、奉り、其後、又獲我の大臣の定り  
ふ、し、もの、まじりて、庚寅の年、所々、國々、地、處、も、まじり、けり、群臣  
洋教の中、物部遠許志大連等、まじりて、一、派、せし、仁像を寺教  
まじりて、我國の神祇怒り、まじりて、まじりて、奉聞し、まじり  
寺門、まじりて、まじりて、まじりて、遠許志大連、下、知、を、河内、和  
白木の鐫物作を、まじりて、勿、許、あ、り、も、仁像を、火中、投入、せ、まじり  
吹、立、り、れ、共、仁像、更に、捨、まじり、まじり、光明を、放、ち、まじり、大臣も  
今、仁像を、先、難波の堀に、捨、まじり、程、あり、まじり、雲、林、堂、の、殿、上

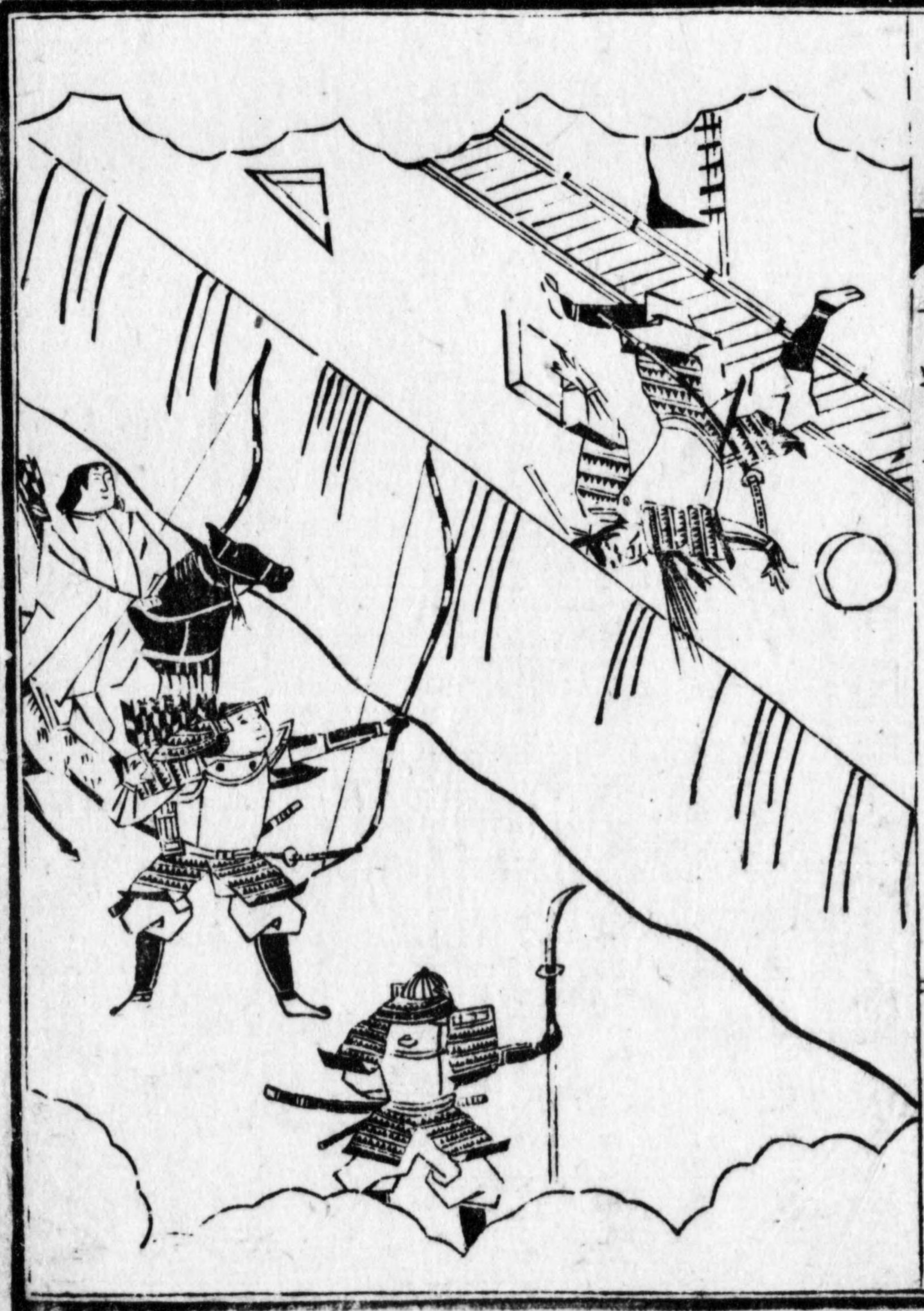




四方に覆いひらけりてよましく國夜のごとくあり且申より靑龍の鬼  
けりこれ出三界の最尊有性の本師に守り如來を失ひしより其  
咎多んぞ種々のべき且報ひつたり遠くまき大ひのまうり  
り猛火を吐かれむ忽ち玉殿くうりて灰塵をちりり明年卯月  
の中より欽明天皇崩御次て赤津太の大臣も温病をうちて夜  
苦しみせき地獄をたふし次つて馬門敏達天皇三年に當りて  
馬不豫あり性仁を召し占むる先帝の御代に依りて失ひ  
おひし馬りりありし馬門をくろの役にも大ひに致さる  
玉ひやぐり初供を難波の堀にうつりし馬門を遠く奉りて  
内裏に法香花燈の供養をありぬる馬門は健い

平愈まきり〜百友賀と奏〜  
大連子屋の大はあり再び和泉紀伊の侍物作を以り  
日本館と唐様作を以り方小敷にて七首七夜吹立られ共さうに  
拵〜むつバ又大旗の船以り何らの候〜のせまきり七日の打  
まの〜に盤の碎け相に折れよ〜拵〜守屋も  
今方丹き又と〜の候〜に〜  
敏達天皇の御所あり〜太子十六方の時守屋を練〜  
て日奉一羽弘法法流布の地とあり〜其後太子塚にみ  
あり如来と王宮と迎〜  
りりて水た〜  
伊那郡麻濱の里に在り

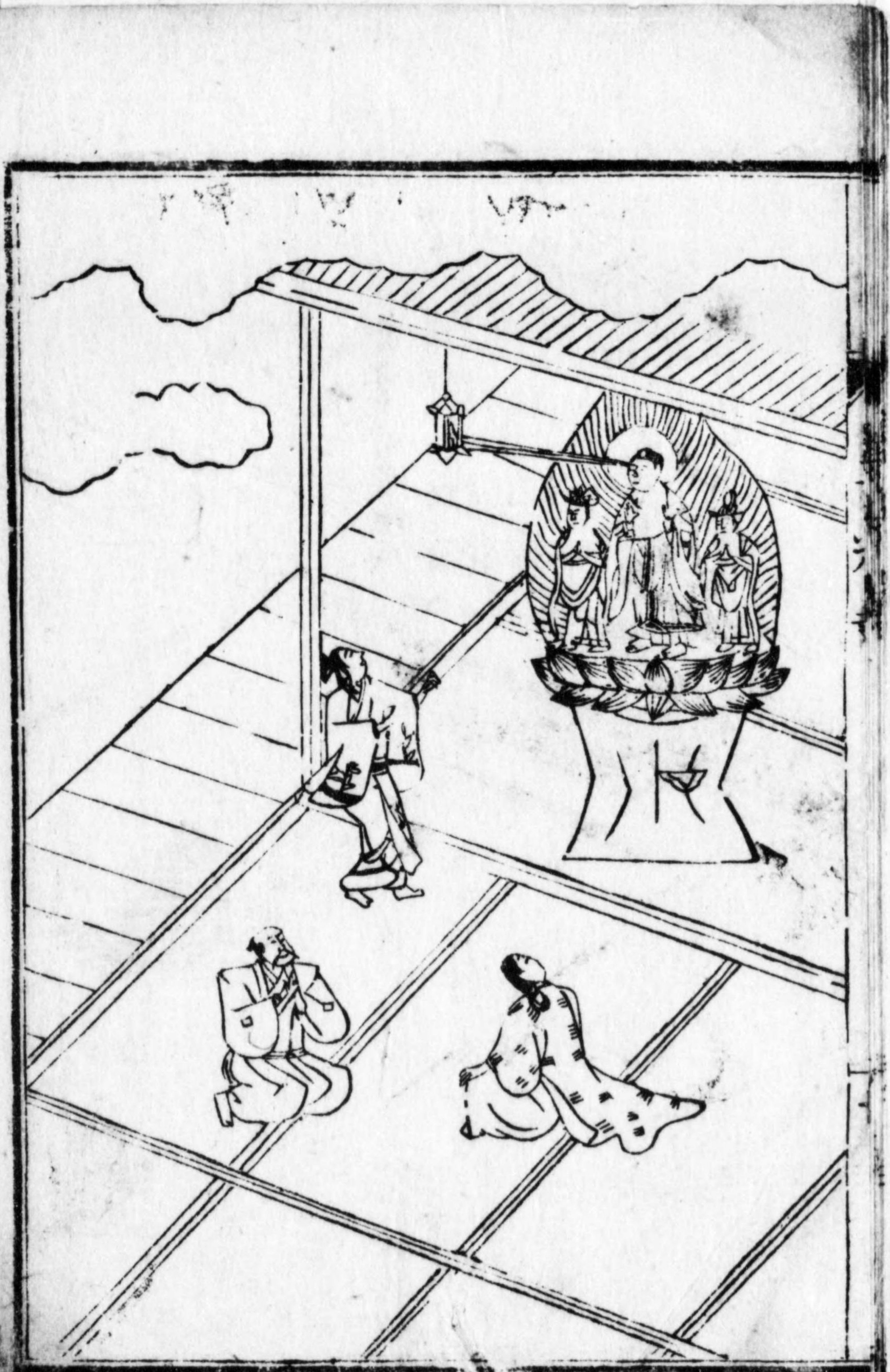
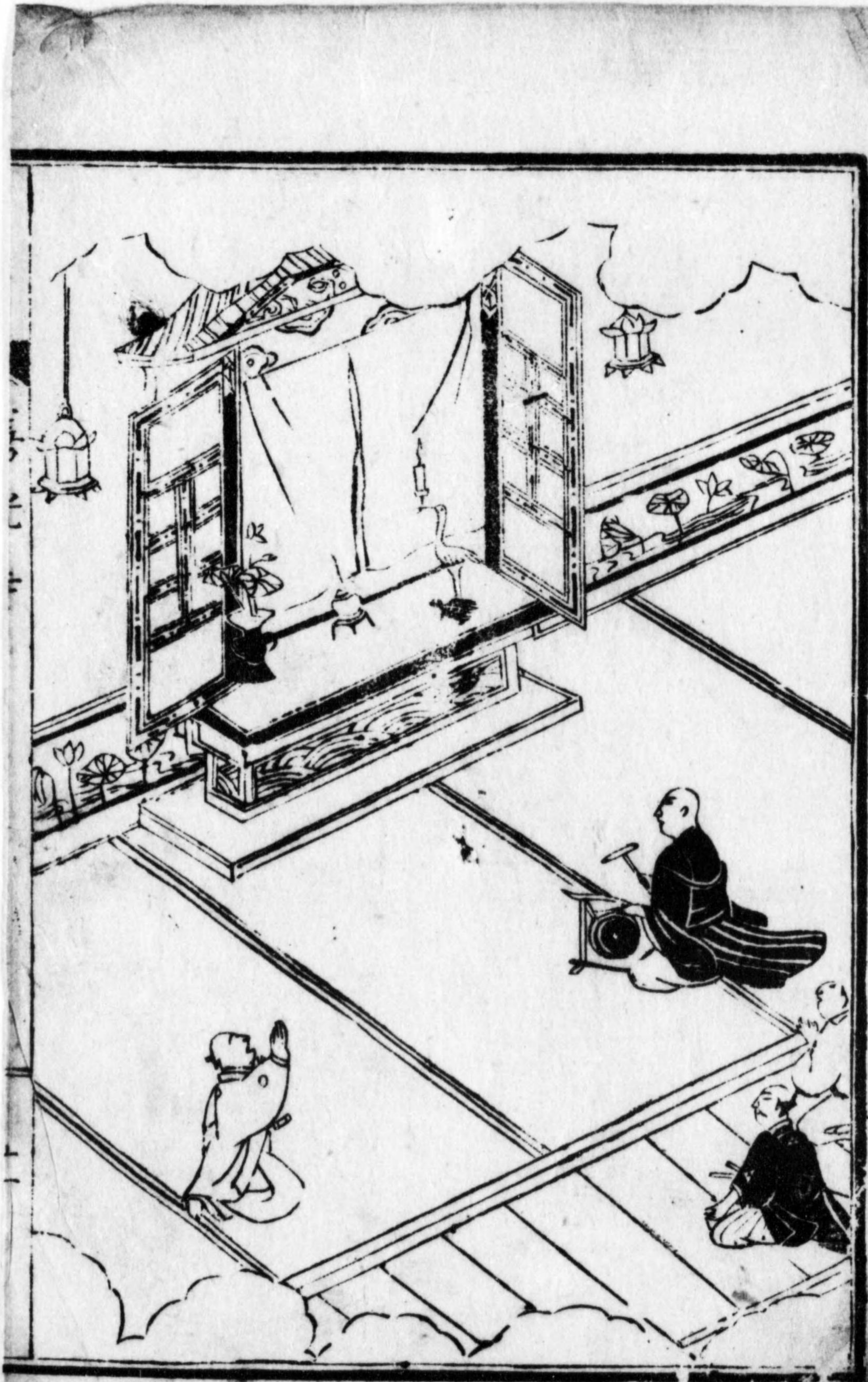




善光寺者あり 國主松壽の没を勤め既帰國の折より  
 彼に臨みしに思故や水原より 光明のやまに  
 けりてそのまはに馳せりしに其光り善光寺  
 小抱きつゝ如き申一打松んせしと後より声をけりてやあ  
 善光寺必に此の寺ありれ我は是生を遂に母を向縁ありて  
 安んせられ一奉る河内他にあり 母は天竺おて月蓋を  
 者百海より聖王今善光寺あり生れぬ我は此を國縁  
 のある寺ありと昔おはせしよりて善光寺如來を有てまは  
 國ありつゝ其の徳れども固くおの清浄なる処ありれを  
 白の上より安んせしより其後州庵を造りて終るるなり



三度の中下西の夜の間やうつらひの光先告めか、金銀  
 珠玉をさざり堂を建てたるも我名を唱ふる事ありけり  
 更に住まはるる事ありての底に住むるは女等かんと西小  
 町に居る人ありと善光成身像を造り具知を安  
 事一尋る皇極天皇の御代壬寅の年に出りて如來の御言  
 小より吉野の郡平井の里に移奉る善光の居を  
 うつらひ給はせり同寺や壬寅年善光嫡子善光  
 依りて居りてのころもあゝ眠るが如く息絶たり又母をけき  
 のあやまり如來ふむけの御理の御恨やりれを如來の御言  
 業因も善むい彼が遺言をいとあむべきよしを御言を



善勝 地獄不墮... 共助... 信濃... 善光... 且... 寺... 奉... 經...

明治十五年二月六日御届

明治十六年三月十四日出版

信濃国上水内郡高田村

著者人 水沢友二郎

九十六番地住

出版人 水沢九十郎

高田村九十七番地住

定価